

令和6年度
一般入学試験

国語

広島県立三次看護専門学校
第二看護学科

受験番号() 氏名()

答案作成上の注意

- 1 受験番号、氏名は、解答用紙の所定の欄に必ず記入すること。
- 2 解答は解答用紙の所定の場所に記入すること。
- 3 配布した問題用紙、解答用紙は持ち出してはならない。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校に通いはじめたころ、犬が飼いたくてしかたがなかった。あまりしつこくせがむものだから、父がサツシユの子犬をもらってきてくれた。毛が茶色と白のぶちだったので「チロ」と名づけた。チロが庭をよちよち歩きまわったり、ひぎのうえで眠りこける様子がかわいくてたまらなかった。それまでより早起きになり、授業が終わるのが待ち遠しかった。そのチロが突然いなくなってしまった。家族みんなであちこち捜しまわったが、みつからない。ところが、ふたたびひよっこり帰ってきた。この小さな冒険者の帰宅をみんなそれは喜んだが、チロは重い病気に冒されていた。ゼイゼイ苦しそうに息をして、やがてよだれを^b外らすようになり、庭のミカンの木の下で死んだ。

私があまりかなしがるので、見かねた父がこう言ってなぐさめてくれた。「そんなに泣くな、また代わりの犬をもらってきてやるから」。だが、私にはこのことばがなんとも腹立たしかった。だって、チロに代わりがいるはずはないのだから。だが、その「かけがえのなさ」を父に訴えようとして、^①はたと困りはててしまった。チロみたいにあんなに「かわいい」眼をした犬はいないと言っても、あんなに「性格のやさしい」犬はいないと言っても、チロの「かけがえのなさ」を表現するどころか、「代わりがきく」ことを証明してしまう。なにしろ、「かわいい」とか「性格のやさしい」とはどんな犬にも言えるし、ほかの動物にも、人間にだって言えるからである。せっぱつまつた私は父にこう訴えた。「だって、チロはチロなんだから」。

私が言った二番目のチロは、あきらかに「チロ」という名前にすぎない。名前だけがチロの存在のかけがえのなさを表現するただひとつの手だてなのだ。チロがいなくなっただけで六〇年がたとうとするいまでは、その思いがますます強くなっている。チロがどんな毛並みをしてたかという記憶も、そもそもオスだったかメスだったかという記憶さえ、ほとんどウ^cれてしまっているからである。それでも、家族で「チロ」が話題になると、六〇年前にチロともにごすごしたときのことがありありと思いだされてくる。チロに「死後の生」というものがあるなら、それはもっぱら「チロ」という名前によって支えられている。

そうは言っても、チロの「死後の生」はしよせんチロをじっさいに知っている私の「記憶」のうちにはしかないのではないか。——そうとはかぎらない。これを読んだみなさんが、「チロ」のことを話題にしてくださいと。みなさんはチロをまったく知らないにもかかわらず、「チロ」をめぐるって交わされる会話は無意味ではないし、それどころか「チロ」は話題にされるたびに「生き返る」。「チロ」という名前はいわば偶然に「外から」やってくる。その名前はもとよりチロ自身が付けたものではない。私がチロの意向におかまいなく付けていたのである。茶色と白い毛のぶちに「ち^dなんて」いる「チロ」はまだしも、ペット保険会社による犬の名前ランキングの上位に入っている「ココ」、「モモ」などになると、犬の具体的な性質をまるでハン^dエイⁱしている。偶然に「外から」やってくるものが名前をもつものの「内側」にしっかりと入りこみ、その「永生」さえも保証するようになるのは、いったいどうい

うことだろうか。

「名前」とは、もつともありふれていながら、きわめて不思議なものである。まず不思議なのは、まわりを見ればどんなものにも「名前」があるということだ。世界はじつに多様なものに満ちているのに、そのすべてを名前で呼ぶことができる。現代社会では次々に新しいものが生みだされるが、それらもただちに名前にまといつかれてしまう。世界のどこまで行っても名前をもたないものには出会えそうにない。

二〇世紀ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーが自慢するところによれば、西洋では「形而上学」という風変わりな学問が古代ギリシア以来絶えることなくイトナまれてきた。この学問のどこが風変わりかと言えば、たとえば物理学は物理現象を、生物学は生命現象をというぐあいに、科学が特定の対象を専門的に研究するのたいして、形而上学はそんな限定をいっさい付けずに、ありとあらゆるものを対象にし、しかも、そのありとあらゆるものが「ある」とはどういうことか、「存在とはなにか」を考えるからである。形而上学のこの問いかけにたいして、「存在するとは名前をもつということだ」と答えることもできそうだ。事物の存在と名前の関係は、このようにきわめて緊密だが、一般名詞よりも固有名詞のほうがいっそう緊密である。なにしろ、一般名詞は複数のものをひとつのグループにまとめておいて、それらを十把一絡げに名指すという怠慢なことをするが、固有名詞は事物の一つひとつを几帳面に名指すからである。

名前とそれが名指すものの関係は、固有名詞のなかでも「個人の名前」つまり「人名」においてさらに濃密になる。われわれは自己紹介するとき名前をまず言うし、自分の名前が侮辱されれば、自分自身が侮辱されたかのように腹が立つ。マレーシア領ボルネオ島のカイアン族は、命名式以前に死んでしまった赤ん坊を家族の一員と認めない。母親は子どもの毛に服することができない。世界のさまざまな民族のなかには、自分の本名を他人に明かすことをタブーとするものもある。自分の本名を他人に知られ、その名前で呼ばれると、他人に自分の魂を奪われ、完全に支配されてしまうからである。「名前」は当人にもつとも「近いもの」であり、彼の 1 の本質的な部分をなしている。

ところが他方、^③名前^gは当人にもつとも「遠いもの」でもある。人名はたとえじつさいには同じ名前の人は何人いようと、本質的には世界中でただ一人を名指すことばである。それはいわば当人のドクセン物である。それなのに、人名はすべてのことばのなかで当人が自由に使えない唯一のことばでもある。自分でかつてに名乗れば、「詐称」とみなされる。それをやるのは詐欺師ぐらいのものだ。人は自分の名前をかならず他人からもらい受けなければならぬ。さらに、私の名前は私を名指すはずなのに、私は自分にかんする発言にそれを使えない。たとえば、「私はきのう公園に行った」という発言を、「村岡はきのう公園に行った」という発言に置きかえるわけにはいかない。そんなことをすれば、「村岡とはだれのこと？」と聞きかえされるにちがいない。私の名前はもつぱら「他者」によってのみ使われるためのことばなのである。

事物や人に名前があるのはまあいいとしても、神様にまで名前があるのはどういうわけだろう。そもそもいったいだれが神様に名前を付けるのか。それ

が人間なら冒瀆ぼうとくというものである。なぜなら、それは神様を人間のレベルにまで引きずり下ろすことにほかならないからだ。神様にふさわしい名前など人間に付けられるわけがない。人間には神様のほんとうのありかた（本質）を知ることなどできないからである。

名前が冒瀆にならないのは、神様自身がみずからの名前を人間に告げてくれるばあいだけである。しかし、神様はなぜわざわざ人間ごときに名前を教えてくださいのたろう。神様は人間に呼びかけてほしいのたろうか。神様は人間と関係することを必要とするのたろうか。もしそうなら、神様が名前をもつということ自体、神様の自立性をそこなうことである。たしかに、ユダヤ教の聖書においては、神はシナイ山上のみずから名前をモーセにあかしたし、神の名前は神と同じぐらい神聖なものとされてきた。人びとはそれをみだりに口にはならなかった。ところが、あまりに神の名前を神聖視したため、長いあいにいったいそれをどう発音していいのかわからなくなってしまった。ユダヤ教の神はみずからに呼びかけるように名前を教えてくれたのに、それが神の名前であるがゆえにどう呼びかけたらよいかわからなくなったのである。

さきほど名前は世界のすみずみまでオオい尽くしているといったが、しかし同時に、名前はみずからつくりだした言語のべールをみずから引き裂き、言語を超えた深淵しんえんをのぞき込ませる不気味なものでもある。言語の使命が「名指す」ことにあるとすれば、固有名詞や個人名ほどの使命を的確に果たしていることばはない。なにしろ、それは目の前であってありありと「見る」ことができるものにかかわるからだ。しかし、目の前で見ているそのものが「な

のであるか」を言い表そうとすると、ただちに困ったことになる。伝統的な考えかたによれば、たとえば「くだもの」という概念（つまり一般名詞）は、このリンゴやこのミカンやこのナシといった個物を見くらべて抽出した共通の特徴（たとえば、樹木に生るとか、湿り気があるといったこと）をその内容としている。したがって、一般名詞はみずから名指すものにかんして、それは樹木に生るとか、湿り気があるとか語ることができる。ところが、固有名詞の対象は唯一のものであり、それそのものをひたすら名指すだけなので、名指しているものについて「語る」ことができない。言語は固有名詞においてみずからの本領をもっとも發揮すると同時に、みずからの限界にも出会う。名前は語りうることと語りえないものの境界線上にある。

このように、「名前」というものは、「近さと遠さ」、「自己と他者」、「内部と外部」、「語りうることと語りえないこと」といった従来の二項対立ではうまく説明できない不思議なありかたをしている。すべてのものが名前をもつというのはよくよくギミョウな事態なのである。

じつさい、名前は西洋の伝統的な言語観や世界観の 2 ではうまく処理できないやっかいものだった。だが、このやっかいものの「名前」をあえて思索の中心に据えてみたらどうだらう。その窓から外をのぞいてみれば、これまでとはまったく違った光景が、すくなくとも西洋的な考えがなじんでい

るわれわれには思いがけない光景が見えるのではないか。しかも、よくよく考えてみれば、こちらの光景のほうがわれわれの日常生活にはなじみやすいかもしれない。なにしろ、^⑤「名前」こそは日常生活においてもつともありふれたものなのだから。

注 形而上学…事物の本質、存在の根本原理を理性的な思惟^しや直観^いによって探究する学問。

問一 傍線部 a j のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「はたと困りはててしまった」のはなぜか、本文中の言葉を用いて簡潔に説明しなさい。

問三 傍線部②「風変わりな学問」について、次の問いに答えなさい。

- (1) この学問が「風変わり」であるのは何を対象とするからか。それを示した言葉を本文中から九字で抜き出して答えなさい。
- (2) この学問からの問いかけに対して、筆者はどのように考えているか。それを端的に示した箇所を十七字で抜き出して答えなさい。

問四 二重傍線部「十把一絡げ」の意味を答えなさい。

問五 空欄 1 空欄 2 に当てはまる語を、次の中から選び、番号で答えなさい。

- 空欄 1
- ① パーソナリティ ② セキュリティ ③ メンタリティ ④ アルテリティ ⑤ アイデンティティ
- 空欄 2
- ① オブザーベーション ② パターン ③ カテゴリー ④ ストラクチャー ⑤ タイプ

問六 傍線部③「名前は当人にもっとも「遠いもの」とあるが、それはどういうことか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい(句読点なども一字と数える)。

問七 傍線部④「言語を超えた深淵をのぞき込ませる不気味なもの」とあるが、それは名前がどのような位置にあるからか。それを示した本文中の言葉を二十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 傍線部⑤「名前」こそは日常生活においてもっともありふれたもの」とあるが、あなたが目指す看護の現場において「名前」とはどのような意味を持つと考えられるか。あなた自身の知識や経験に基づいた具体例を示しながら、二百字程度であなたの考えを述べなさい（句読点なども一字と数える）。